

2022 年度プロジェクト活動報告：コミュニティ・レジリエンス・リサーチ

■プロジェクト代表：金山智子

分担者：小林孝浩、吉田茂樹

履修生：(M1) 坂本あゆみ、林、楊慶新

(M2) 王芯藍、路雨嘉、小林玲衣奈、松村明莉

■研究概要

本プロジェクトでは、「人新世」の時代を、私たちはどう生きどう変えていくのか。自然と社会を一つに捉える社会生態系システムを理論的視座におきながら、大きな変容にも耐えながら生きるレジリエンス力とは何かについて、千年以上生き続ける小さな山村集落でのフィールドワークを通して考えていくことを目的とする。3年目の最終年度は、前期はフィールドワークを行いながら、オープンハウスでその一部を展示し、また後期の規模の大きな成果展示に向けて準備をしていった。後期は、研究成果の発表として4つの機会を設けた。まず、岐阜県博物館にて企画展「ねお展：アジール（自由領域）であり続ける地域のこれまで そして これから」を開催した。次に、その振り返りをテーマにした展示『ねお展を考える－制作者のことば、まなざしー』を行った。また、『ねお展』の関連企画として開催した座談会の内容を、今年度の本学紀要(Vol.14)に掲載した。そして、これまでの調査をまとめ、『1500年続く山の集落から学ぶ一人神性時代におけるコミュニティ・レジリエンスー』と題して出版する（2023年夏刊行予定）。

■成果発表

(1) IAMAS オープンハウス：フィールドノート 2022

2022年7月23日～24日

今年度は6月からほぼ毎週フィールドワークを行ない、オープンハウスでは、修士1年メンバーが集落や森でのフィールドワークの記録と記憶をフィールドノートとして展示。

(2) 岐阜県博物館企画展『ねお展：アジール（自由領域）であり続ける地域のこれまで そして これから』

2022年10月1日～30日

岐阜県博物館マイミュージアムギャラリー

本プロジェクトの集大成として、岐阜県美術館にて企画展『ねお展：アジール（自由領域）であり続ける地域のこれまで そして これから』を開催した。これまでの長期にわたる根尾でのフィールドワークによって構築された地域の住民との連携を基盤とし、50名近くの地域の人たちの参加協力により、想定より多い24の作品を展示した。展示には、根尾地区をはじめ県内外の地域から多くの来場者があった。また地域連携の強化を目指す岐阜県博物館にとって、本展示はそのモデルとなるものとなり、博物館側からも高く評価された。最終的に26日間で760名以上の来場者があり、来場者アンケートでは57%が大変満足、33%満足と好評価を得て、その多くが展示を通して根尾の自然や文化に興味関心をもったと回答した。研究成果が地域へと還元される可能性が示唆されたといえよう。

(3) IAMAS2022: 展示『ねお展を考えるー制作者のことば、まなざしー』

2023年2月23日～26日

ねお展の振り返りとして、改めて根尾の人たちとプロジェクトメンバーに「ねお展とは何であったのか」についてインタビューを実施した。IAMAS2023では、インタビューを映像とテキストで展示した。また、ねお展でのアンケート調査結果も展示した。

(4) 情報科学芸術大学院大学 紀要 第14巻 2022：pp. 4-25

『ねお展：アジール（自由領域）であり続ける地域のこれまで そして これから』
誌面座談会

森島勝博（岐阜県博物館館長）、伊村靖子（国立新美術館情報資料室長）、中原淳（一社よだか総合研究所代表理事）、金山智子（IAMAS）により、博物館でねお展を開催した意味と意義についてディスカッションした内容を掲載。

(5) 出版：『1500年続く山の集落から学ぶー人神性時代におけるコミュニティ・レジリエンスー』

さいはて社

2023年夏頃に刊行予定。